

最近、ベトナムに行った。地元の土産物屋やスーパーでは円やドルが使えないので、添乗員さんのアドバイスに従い五〇〇〇円ほどベトナム「ドン」に両替した。ベトナムではコインが流通しておらず、すべて国祖ホーチミンの顔入りの紙幣だ。だが受け取った額を聞いて、思わずのけぞった。何と九八万ドンという。

いや、交換比率で計算すれば驚くには値しない。だが、しかし、である。一瞬にして百万長者になれるとは、ベトナムは景気がいい。

夜、小腹が空いたので川沿いの屋台をひやかして、ソーセージとつくねとうずらの串揚げを一本ずつ買った。すると売り子の女の子がたどたどしい英語で、四万ドンだという。

四万、だと？

瞬間、ボラれたな、と思いつつも郷に入れば郷に従え、と目をつむりえいやと大枚四万ドンを支払った。我ながら太っ腹である。缶ビールをつけたらさらに二万ドンむしられた。これではまるでぼったくりバーだ。後悔に打ちのめされつつホテルに戻ったが、ふと思いついて円に換算してみた。

串揚げ三本二〇〇円。ビール一本一〇〇円。

や、安い。こんなことならもつとつくねを買えばよかった……。現金なもので、その後ホテルの部屋でのひとり呑みは充実した気分になった。

ドンとエン、一字違いでえらい違いである。

そもそもお金とは面妖めんようなものだ。

それは水にたとえられる。生きていくのに必須のも



絵・江口修平

## お金にまつわる エトセトラ

海堂 尊

のという意味ですね、などという浅はかな識者の声が聞こえてきそうだが、ミステリー作家を舐めては困る。私のたとえはもつと深いのだ。

水は固体、液体、気体の三相になることは、みなさんもご存じだろう。お金も水と同様に、三相に変態するのだ。

お金といえば真つ先に頭に浮かぶのは、紙幣や硬貨だ。これは水にたとえれば氷、つまり固体の相に当たる。

液体の相は、お金で物を買うという行為になる。水が植物を潤し動物の血液になるように、お札やコインがバナナや林檎や焼酎や牛丼になり、その人の血肉になる。それだけではない。お金は私が執筆した本にもなる。

気体の相はお金が数値化された状態だ。これは今の社会では空気中の水分のように重要だ。預金通帳の残高、借金の総額、スイカやパスモやTカードにある得体の知れないお金である。しかもそれは物の価値を計る物差しにもなる。一〇〇円のアイス、一八〇〇円の私の本（しつこい）、三万円の背広、一〇〇万円の中古車、三五〇〇万円の中古マンション。こんな風に羅列するだけで、安いか高いか、第三者でも判断できる。

お金は、人間社会が成立する上で必要不可欠なものではあるが、考えれば考えるほど何やら面妖すぎて、その実像がつかめなくなる。

気がつくくと、現代社会に生きている私たちは「かみさま」ではなく、「かねさま」に支配されているようにすら思えてくるのだった。

かいとう・たける ● 1961年千葉県生まれ。外科医、病理医を経て2005年『チーム・バチスタの栄光』で『このミステリーがすごい!』大賞を受賞し作家デビュー。同シリーズは累計1000万部突破。最新作はキューバ革命の英雄チェ・ゲバラの生涯を描く『ポーラスター』シリーズ第1巻『ゲバラ覚醒』。第2巻『ゲバラ漂流』は2017年10月刊行予定。

